

内容一覧表	かんじひよう	かたかなの ひよう	虫の なき声	汽車の 音	朝の 音	八 いろいろな 音	ねこと 小ねずみ	ながい はなし	夏休みにした こと	七 おはなし会	まどめ	先生への てがみ	夏やすみ	三びきの 子ぶた	さわむどんの うなぎつり	たのしい 本	草とり	田うえ	しろかき	たねまき	田うえ	みちあんない	にぎやかな とおり	えちず	三 町	しおひがり	ひこうじよう	はれた そら	カナリヤ	ひよこ	子犬	かわいい どうぶつ	もくじ
	117	116	112	110	108	108	102	98	93	92	91	80	76	76	62	56	56	53	48	47	46	46	37	30	28	28	21	16	16	10	8	4	4



田うえ

きょうはうちの田うえです。
雨がふっているので、わた
しはうちの途中で本をよん
でいました。すると、おかつて、
おばあさんが、

「みえ子。おちやのしたくが

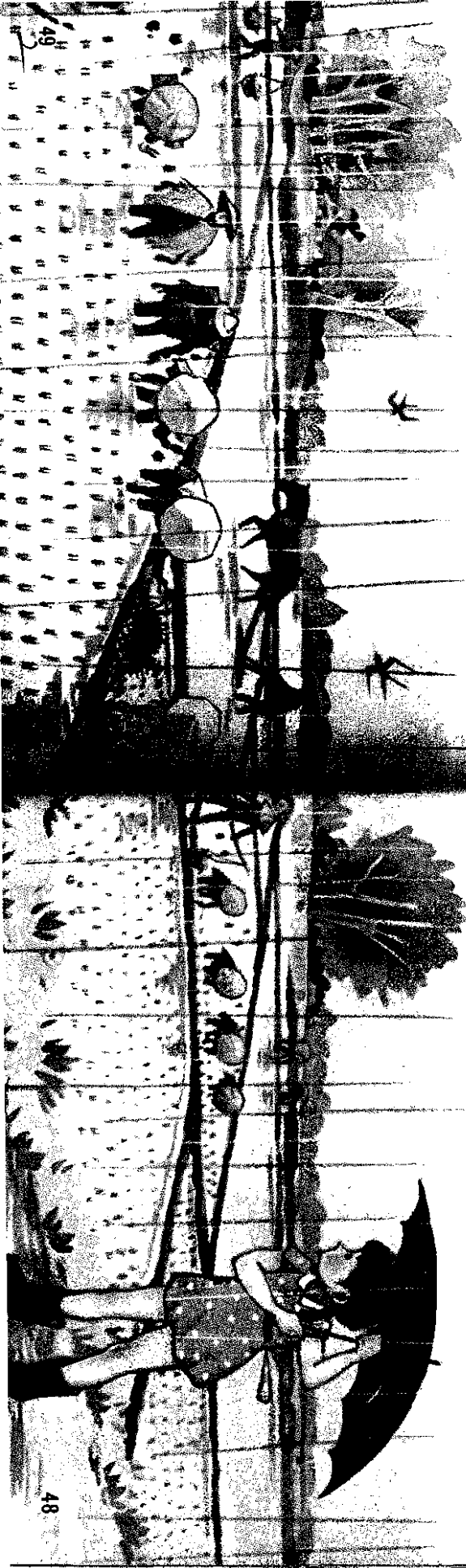
できたから、みんなをよんで

きておくれ。」

といました。わたしは、かき
をさして、田んぼへ、でかけま
した。

雨の中ではたらいでいる
人が、あちらこちらにたくさん
見えました。田んぼには、みどり
のなえが、ずんずんうえられ
ていきます。わたしは、いそい
であるきました。

うちの田では、みんながいっ



しょうけんめいに なえを うえて いました。しんせきの おばさんや、きんじよの 人たちも います。わたしが、大きな ニエで、

「おちやだよ。」

と いったら、みんなは、びくりましたように、いっしょに 二ちらを 見ました。おかあさんが、

「もう ちよつと うえてからね。」

と いいました。

みんなは、また 田うえを つづけました。一れつにならんで、きまりよく なえを どの 中に さして

いきます。まるで きかいのように、手が うごきます。みんな、雨に ぬれるのなんか、くいきそうです。ほかの 人は、みんな すげがきを かぶつて いますが、

しんせきの おばさんだけは、古 い むぎわらぼうしを かぶつて

います。

おとうさんが、なわしろの ほうから、なえを かごに 入れて、おもそうに せおつて きました。おとうさんは、なえを おろすと、



「よびにきてくれたのかい。もうじき行くよ。」

と、いいました。わたしは、

「はい。」

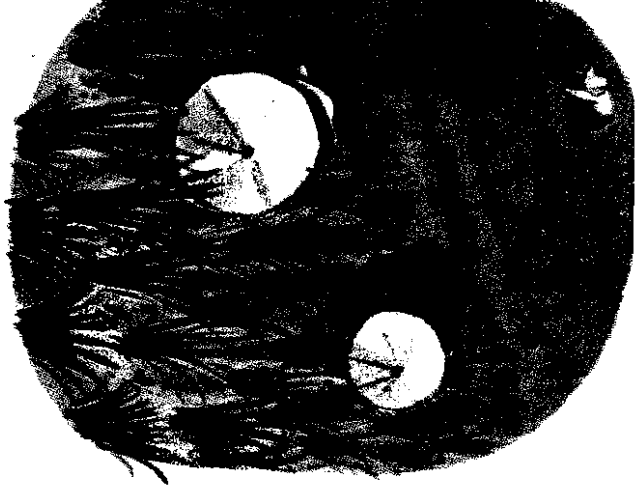
と、いいました。

まえより、大つぶの雨がふって、きました。とお
くのほうでは、たらいに、いる人たちは、ぼうつと
して、見えなくなりました。

わたしは、

「さきに、かえるよ。」

と、いって、かえって、きました。



草とり

いねは、だんだん、大きくな
ります。いねの、あひだに、草がな
はえて、きます。この、草をと
るのが、いねを、じょうぶに、そ
だてるのに、だいじな、しごとで
す。この、しごとを、あつい、夏
の、日を、あびながら、なんべん
も、します。

新しい国語 6年II
 昭和36年発行
 昭和35年検定
 東京書籍株式会社



もくじ

一 味わって読む	4
(一) すすめの生活	4
(二) 俳句	8
(三) 秋の流いき	16
まとめ(漢字の学習・みんなの詩集)	18
ローマ字 4	20
二 記録をまとめる	22
(一) ひいおじいさん	22
(二) 農村の労働時間	26
(三) 氷のとけかたの研究	31
三 作られるまで	38
(一) えいがの歴史	38
(二) ペニシリンを作りあげた人々	48
ローマ字 5	62
四 小説	64

大きなしらかば	64
まとめ(ことばの学習)	79
五 みんなで話し合う	80
ガリレイと宗教さいばん	80
六 人間の尊さ	92
(一) 人間の自分	92
(二) ひとりひとりの人間	98
七 きょうげん	106
ぼんさん	106
八 広い世界	114
少年使節ローマへ行く	114
新出漢字表	131
当用漢字列表音訓表	132
ローマ字資料	142
内容一覧表	

て、今ではだいぶんにぎやかになりました。この大きなくすのきを見て
いると、遠いむかしのようすが目の前にうかんで、見たこともないひい
おじいさんが、元気で現われてきそうに思われます。

農村の労働時間

社会科で、「農村の生活」について
研究した時、わたしたち二はんは、
「農村の労働時間」について調査した。
まず、わたしたちは、

- (1) 農村の人々は、一年間、月別
に、どんな仕事をするか。
- (2) 農村の人々は、月別に、毎日、

平均何時間働くか。

の二つの点について調べた。

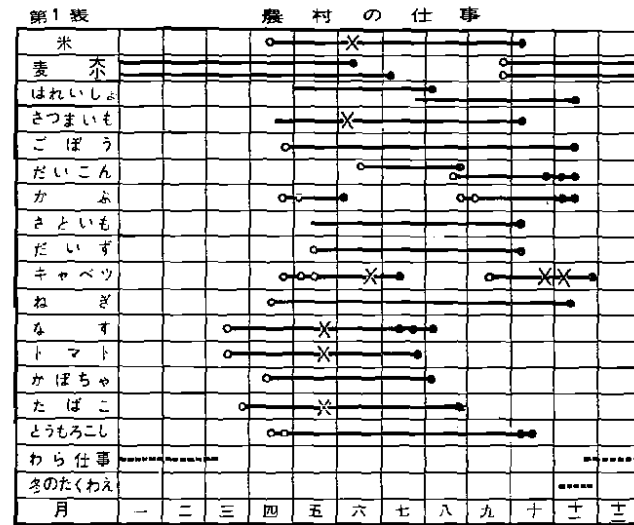
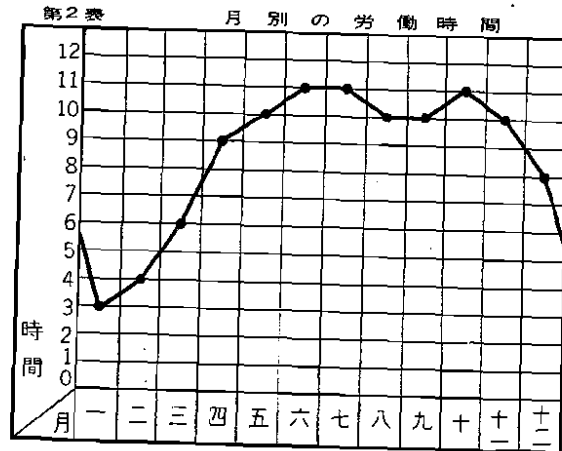
(1) 一年間の月別の仕事

農村では、一年間に、どんな仕事を
するか。このことは、村の農家十けん
をばらばらに選び出して、作物など
田畑の耕作を中心にして調べた。それ
をまとめたのが、第一表である。

(2) 月別の毎日の平均労働時間

月別の毎日の平均労働時間については、農協の事務所で調べた。
それをグラフにしたのが、第二表である。

- (1)
- (2) の調査から、毎日の労働時間に、一年のうちに、二つの山がある



備考 ○は種まき ●は収穫 ×はなえつけ —は作物が経て作られていることを表わしている。

農村の労働時間

月別

農家

グラフ

ことがわかる。つまり、二回の農はん期があるわけである。第一の農はん期は、六、七月で、田植え、大麦小麦の収かく、さつまいものなえつけ、だいこんの種まきなど、いそがしい仕事がたくさんある。一日平均労働時間は、十一時間になっている。第二の農はん期は十月で、いねかり、だっ穀を中心にして、とうもろこし、さつまいもの収かくなどが重なっている。労働時間は、平均十一時間である。また、これらの農はん期の前後、五、八、九、十一月は、平均十時間の労働である。

ところが、これは、農家の収入のもとになる農作業だけの労働時間で、作物を売りに行く仕事や、主婦の家事に費やす労働時間は、はいっていない。これらの労働時間を合わせると、農家の人の労働時間は、たいへんなものになるだろう。それでも、六、七、十月には、人手が足りないので、老人や子どもまでが働いている。あかんぼうのせわや家事や軽い農作業のてつだいなどをするのである。

このような調査をしているうちに、わたしたちは、馬や牛を使っている農家のほうが、平均して、労働時間の短いことに気がついた。そこで、次に、かちくの労働力について調べてみた。第三表がそれである。県の

第3表 牛や馬は人の何倍働くか

	畑を耕す	土をくたくす	種まき	草取り	収かく	平均
人	1	1	1	1	1	1
牛	5	10	10	8	6	約8
馬	6	12	12	10	8	約10

ちくさん課で発表しているものである。これによると、牛は人の約八倍、馬は人の約十倍もの仕事をしていることがわかる。馬や牛を使えば、それだけ仕事の能率が上がる。それで、かちくを使っている農家のほうが、そうでない農家よりも、平均して、労働時間が少なくてもよいのだろう。それに、かちくを使っている農家のほうが、たいへい広い田畑を耕作していて、収かくもずっと多く、

農はん期

大麦
小麦
なえつけ

だっ穀。

農作業

主婦
家事
費やす

人手

労働力

ちくさん課

能率。

耕す

所得金額も多くなっている。

次に、わたしたちは、この村の牛馬の一年間の労働日数を調べてみた。すると、平均して、次のような結果が出た。

馬	牛	田畑の仕事	
		うんばん	よそにやとわ れる日
二八日	二七日	三四日	一三日
六六日	三三日	七四日	一二七日

これによると、この村の馬や牛は、一年の半分以上遊んでいることになる。これでは、こやしをつくるために、かっているようなものである。もっと馬や牛の利用を考えて、遊んでいる日に、かちくのいない家に安く賃貸してもするようにすれば、仕事の能率も上がって、労働時間は、もっと少なくてすむようになるだろう。

以上が、わたしたち二はんの共同調査のあらましである。わたしたち

は、この調査研究から、農村の仕事をもっと計画的に能率をよくして、労働時間を少しでも少なくしなければならぬと感じた。牛や馬のほかにも、もっと機械を利用することが考えられるし、主婦の労働を助けるために、台所の改善なども考えられる。農村生活の能率化を、わたしたちは考えたいと思った。

氷のとけかたの研究

夏休みになって間もなくの、ある日の午後でした。母が、おやつにアイスクリームをくれました。弟のぶんも、わたしが預かりましたが、弟は、どこへ遊びに行ったのか、見あたりません。わたしは、弟のぶんをつくえの上に置いて、弟をさがしました。けれども、やはり見あたりません。しかたがないので、弟の帰って来るのを待ちましたが、アイスク

所得金額

うんばん

賃貸し

共同調査
あらまし

計画的に

能率化

目次

一 詩を読む にれの町	4
二 読書をしよう 大造じいさんとがん	12
三 見学記録を書く グループで書いた見学記録	29
四 説明文を読む (一) 動物の能力 (二) 橋	41
五 説明をする 木の高さをはかる方法——山田君の説明	55
六 物語を読む 大きなしらかば	60
◆ 敬語の使い方	78
七 手紙を書く	80
八 報道文を読む	86
日本隊、初めて南極点に着く 新聞記事の読み方	86
九 発表をする 町の名についての研究	93
◆ 漢和辞典の使い方	102
十 伝記を読む 宮沢賢治	104
十一 感想を書く 何について、どう思ったか	117
十二 読書をしよう 深海をさぐる	125
十三 自分の考えや感想を短くまとめて書く	132
十四 物語を読む 竹取物語	136
新しく出た漢字	148
教育漢字音訓表(部首別)	150
ローマ字の表	160

新しい国語 5下

昭和46年発行 (昭和45年検定)

東京書籍





○ 作中の人物が、どのように育ち、どんな考えを持ち、どんなことをしたかを読みとる。

○ 作中の人物の生き方や考え方について、感想をまとめる。

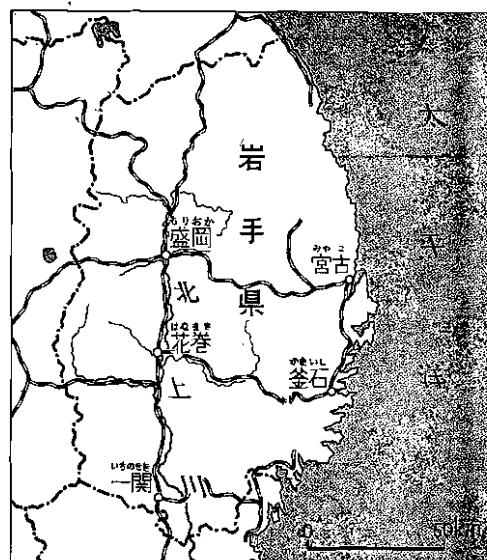
宮沢賢治

1

「セロひきのゴージュ」「どんぐりと山ねこ」「風の又三郎」などの童話の作者として有名な宮沢賢治は、明治二十九年（一八九六年）八月二十七日に、岩手県稗貫郡花巻町（今の花巻市）に生まれた。

花巻は、花ふぶきが北上川の流れに散り、はなやかなうずをまくけしきを地名にしたのだという。しかし、のどかに見えるこのあたりの平野

のどか



部でも、人々は、むかしからたびたび冷害に苦しめられてきた。夏になっても気温の上がらぬ時は、いねは花を開かず、実を結ばないのである。賢治が生まれた年の八月も寒い夏で、そのうえ、地しん、大水と、災害の続いたひどい年だった。

賢治が小学校三年生の時も、ひどい冷害の年だった。農家の子どもたちの中には、学校へ弁当を持って来られない者もいて、お昼になると、そっと運動場へ出て行く。賢治は町の商人の子で、弁当にこまることはなかったが、そうした友だちのすがたを見ると、悲しくて、自分のせいであるかのようにむねがいたむのだった。

弁当

そのころのことである。ある日、ひとりの子が、そのころはやりだし

たばかりの赤いシャツを着て学校へ来た。

「わあ、めっかし、めっかし。」

と、いじわるな子がひやかした。めっかしというのは、おしやれという意味である。ほかの子もおおせい群がつて、おもしろそうにはやしたてたので、どうとう、その子はなきだしてしまった。そこへ、賢治がかけつけた。「ほくも、あした赤シャツを着て来るから、いじめるなら、ぼくをいじめてくれ。」

みんなはだまつてしまった。勉強がよくでき、だれにもやさしく、それに、楽しいおとぎ話を聞かせてくれる賢治に、逆らう者はなかつたのである。

こんなふうに、賢治は、子どもものころから、気の毒な人を見ると同情

し、助けずにはいられない心を持っていた。

2

賢治は、小学校を卒業すると、盛岡中学校（今の盛岡第一高等学校）に入学した。中学にはいつてから、鉱物や植物の採集に熱中し、ひまをみつけては、近くの山や野原を歩き回った。また、短歌に興味を覚えて作り始め、文学にもめざめていった。

大正三年、中学を卒業してから、しばらく家業のてつだいをしていたが、そのころ、法華經という經を読んで、強く心を動かされた。宮沢家は、仏教を厚く信ずる家だったので、賢治は、おさない時から、寺の説教をよく聞いたものだが、このころから、かたい信こうを持つようになつた。そうして、多くの苦しみなやむ人をしあわせにするために、自分

短歌

めるにめざ

家業

説教

ひやかす
群がる
るはやしたて

逆らう

の身をささげようと考えるようになった。

よく年、賢治は、再び勉強を続けるために、家のてつだいをやめて、盛岡高等農林学校（今の岩手大学農学部）に入学した。学校では、特に地質の研究にうちこみ、卒業後もなお研究生として残って、土や肥料についての研究を続けた。また、六か月もかけて、稗貫郡内を歩き回り、土の性質を調査した。この調査によつて、どこの土地にはどんな作物が適しているか知ることができた。また、行くさきざきで、農家の苦しい生活も深く知ることができた。

このころから、賢治は、童話や詩を書き始めた。童話ができると、さつそく弟や妹に読んで聞かせた。それらは、後に、童話集「注文の多い料理店」となり、また、詩は「春と修羅」という題で本にまとめて出版された。しかし、このすばらしい作品に目を止める人も少なく、ほとん

肥。料

出版。する

ど売れもしなかった。

大正十年十二月、賢治は、稗貫農学校（今の花巻農業高等学校）の先生になり、熱心に新しい農業のやり方を教えた。ところが、生徒の多くは、学校を卒業すると、農業をやらずに役所や会社につとめてしまう。この事実を見て、賢治は残念に思った。賢治は考えた。農業は苦しい重労働であり、しかも収入が少ない。その原因の一つは、農業のやり方の古さにあるのではないか。土の性質と作物の品種との関係や、肥料のやり方などを、学問をもとにして改善せずに、ただ旧式なやり方をくり返しているだけなので、くらしは楽にならず、仕事にも喜びがない。そのために、青年たちは農業をやりたいがらないのだ。賢治は、こう考えてくると、学校で教えていることだけにあき足らず、広くいっばんの農民に農業の学問を教え、農業のやり方を改善しなければならぬと思った。

重労働。

品種

改善。する

旧式

青年

大正十五年、賢治は、農学校を退職した。そして、花巻の町はずれの家に移り、あれ地を耕して、畑を作った。トマト、はくさい、花などを



作り、農民のなかま入りをした。それから、家を教室にして、わか者や熱心な農民を集めて農業の学問を教えた。また、農民のくらしを豊かにする芸術の必要を考えて、その講義もした。

賢治は、時間のある限り村々を回った。どの村の農民も、貧ぼうからのがれたい、少しでも収かくをふやしたいと、必死になって働いていた。その人たちのために、田んぼの土の成分を調

退職する
耕す

貧ぼう

収かく

成分

べ、そこに合う品種と肥料のやり方などを、自分で印刷した肥料設計書にいちいち書いてわたした。ある年は、半年のうちに、二千まい以上も書いたことがある。農民がお礼に金銭や品物を差し出しても、賢治は、いっさい受け取らなかった。食事時になると、自分の持つて来たパンですませ、せいぜいお茶をごちそうになるだけだった。

賢治が農業を始めた年も、その次の年も、天候はあまりよくなかった。賢治は、心配でたまらず、村々をかけ回った。しかし、賢治の指導した田のいねは、悪い天候にも負けないで、順調に育っていった。なんとか、実りの秋をおかえそうに思えた。

ところが、ある日、おそろしい大雨がやってきた。たきのような雨が、いねをなぎたおした。賢治は、気がくるったように自分の指導した田を見て回った。どこの田にも水があふれ、たおれたいねが海草のようにゆ

金銭・品物

せいぜい

実り

なぎたおす

らいていた。もし、いねが全めつしたらどうなるだろう。行き会う農民の顔は、まっさおである。賢治は、しつっこくふり続く雨の中を、

「がんばって水はけをやってください。」

と、村から村へかけ回り、はげまし続けた。そうしているうちに、ようやく、天候の回復する見こみを測候所から聞くことができた。

「かみなりが遠のけば、雨があがるでしょう。損害を少しでも小さくするように、水はけを続けてください。」

賢治は、すぐさま知らせに回った。賢治のずぶぬれのからだは、熱でふるえていた。

その夜、賢治は、ねむれなかった。やがて、しだいに夜が明け、東の空はばら色にそまつた。雨が去ったのだ。たおれふしていたいねが、つぎつぎに起きだしてきた。なえの作り方、肥料のやり方のわずかなちが

いで、賢治の指導した田のいねは、りっぱに立ち上がったのである。

「先生。宮沢先生。」

だれの顔も喜びにかがやいている。賢治は、このたくましいいねの波をかき分けておどり回りたかった。だが、そのからだは、熱のために、もう立っていられなかった。

3

こうして、からだを悪くした賢治は、二年あまり、りよう養した。そして、昭和六年、からだが回復すると、せっかいを作る工場の技師になった。せっかいは、土の性質をよくするのに役だつのだ。だが、ここでもあまり熱心に働きすぎて、その年、再び病にたおれてしまった。有名な「雨ニモマケズ」の詩は、その病のところで手帳に書きとめられたもの

全めつする

水はけ

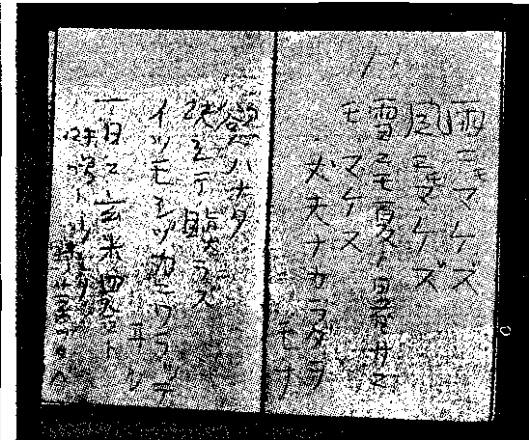
回復する
測候所
遠のく
損害

技師

病



30才ごろの宮沢賢治



手帳に書きとめられた「雨ニモマケズ」

である。

それからずっと、賢治は病しようにあったが、書きためていた童話や詩の原こくに手を入れたり、たずねて来る農民があると、熱心にその話を聞いてやつたりした。

病しう

昭和八年という年は、何十年に一度という豊作だった。その年の九月十七日から氏神様の祭りが始まった。天気もよく町は人出でにぎわった。賢治は、門まで出て、みこしが通るのをうれしそうにおがんだ。

豊作

祭りのあけた二十日には、肥料の相談に来た人と、げんかんで長い間話し合った。

そのあと、ひどい熱が出、ついに、三十七才のわかさでなくなった。

昭和八年（一九三三年）九月二十一日である。

（堀尾青史の文章による）

学習のために

①

1 宮沢賢治は、いつ、どんな所で生まれましたか。

2 小学校時代にどんなことがあったか読みとりましょう。そして、そのことから賢治がどんな子どもであったか、考えてみましょう。

②

1 賢治は、どんなことを学び、どのように成長していきましたか。

2 学校を出てから、どんなことを考え、どんなことをしましたか。

(1) 農学校の先生になって

(2) 農民のなかま入りをして

③

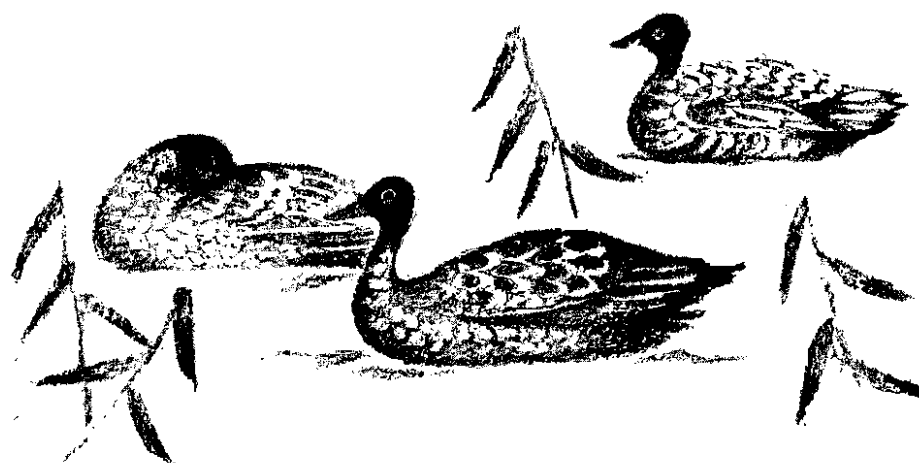
○ からだを悪くしてからあと、賢治は、どんなことを考え、どんなことをしましたか。

目次

一 短歌や俳句を読む	4
(一) 短歌	4
(二) 俳句	8
二 読書をしよう	12
おじいさんのランプ	12
三 研究記録を書く	30
詩「山いも」の研究	30
四 報道文を読む	40
新しい資源の開発	40
五 説明をする	49
六 脚本を読む	55
盆山	55
◆ ことばの種類	63
七 感想を書く	64
八 説明文を読む	71
(一) 正倉院	71
(二) 版画の味わい	77
九 報告をする	84
東京見学	84
十 伝記を読む	92
アメリカへわたる	92
十一 手紙を書く	108
十二 考えを述べた文章を読む	114
(一) 練習と人生	114
(二) 絵をかく楽しみ	120
◆ 漢字の練習	124
十三 自分の考えを短くまとめて書く	126
十四 読書をしよう	130
くもの糸	130
新しく出た漢字	142
教育漢字音訓表(部首別)	144
六年で学習する教育漢字以外の漢字	154
ローマ字の表	156



新しい国語 6下 昭和46年発行(45年検定)



研究記録を書く



- どんな研究を、どんな方法でしたかが、よくわかるように書く。
- 書くことによつて、自分の考えを深め、知識を確かなものにしていく。

詩「山いも」の研究

岸田 登

小林 光一

一 研究したわけ

このあいだ、学校放送の時間に、大関松三郎おおせき まつさぶろうという人の作った「虫けら」という詩の朗読があつた。ぼくたちは、その詩に、とても心をうたれた。そして、その作者に興味があつた。ぼくたちは、作者はどういう人か、ほかにどんな詩があるか、図書室で調べてみた。

ぼくたちのいちばん気に入つたのは、「山いも」という詩であつた。

この作品を通して、大関松三郎の詩がなぜ心をうつのか、また、作者はどんな人かを研究してみることにした。

二 研究した作品

山いも

大関松三郎

しんくしてほつた土の底から、
大きな山いもをほじくり出す。

出てくる、出てくる。

でっかい山いも。

でこでこと太った指の間に、

しつかりと土をにぎつて、

朗読

どつしりと重たい山いも。

おお、こうやって持ってみると、

どれもこれも、みんなひやくしような手だ。

土だらけで、まっ黒け。

節くれだつてひげもくじや。

ぶきようでも、力のいっぱいこもった手。

これは、まちがいないひやくしような手だ。

つあつあの手そっくりの山いもだ。

おれの手も、こんなになるのかなあ。

三 研究の計画

(1) 作者について調べる。……………岸田

(2) ことばの意味を辞典で調べる。……………小林

(3) 詩の表現について話し合う。……………岸田、小林

(4) 感想を書く。……………岸田、小林

四 わかったこと

(1) 作者について (岸田)

作者については、児童文学の事典で調べた。そこには、だいたい、次のようなことが書いてあった。

大関松三郎（おおぜき・まつさぶろう）

○大正十五年（一九二六年）に、新潟^{にいがた}県の農家の次男として生まれた。

○小学校四、五年のころから、家の手助けをして田畑で働いた。

○詩を書くのが好きで、野ら仕事の喜びや悲しみを、そのまま、ノ

トに書きつづった。

次男・

野ら仕事